

喜界島方言における Evidentiality

加藤 慶将

関西学院大学 総合政策学部

1. はじめに

本研究発表の目的は琉球奄美喜界島方言における Evidentiality の記述及びその分析である。Evidentiality とは information source (情報源) を表す手段である (Aikhenvald 2018)。本研究では、琉球奄美喜界島方言を研究対象に調査を行なった。その結果、Indirect Evidentiality を *hu* という形態素で義務的に明示する形式が確認された。以下で紹介する Indirect Evidentiality の標示体系は、喜界島方言の記述に関する主要な先行研究、白田 (2016) では記述されていないことから、本研究は喜界島方言研究に新たな視点を加えることにつながると考えられる。さらに、喜界島方言における Evidentiality はそれ自体が独立した一つの文法カテゴリーであることが示唆される。これは近年様々な言語の研究 (Aikhenvald 2018) で明らかにされている Evidentiality の特徴に沿うものである。以上から、本研究は、琉球方言研究のみならず通言語的 Evidentiality 研究にとっても重要な知見を与え得ることを示す。

ユネスコ(国連教育科学文化機関)が 2009 年 2 月に発表した”Atlas of the World’s Languages in Danger” (第 3 版) によると、世界の 2,500 の言語が消滅の危機にあるとされている。喜界島方言はこのリストに含まれており、言語の保存と継承が急がれている。喜界島方言の特質として、本土の日本語共通語や他の琉球諸語と異なった性質を持ち合わせている。

2. 先行研究

2.1 通言語的 Evidentiality 研究

Evidentiality (証拠性) は世界各地で近年精力的に研究が進められている分野である。特に類型論からの研究成果が著しい。本章では、類型論的観点からの Evidentiality の特徴を紹介する。

等しく全ての自然言語は「情報源 (information source)」の表現手段を有するとされている。その中でも、Evidentiality を独立した文法範疇 (grammatical category) として有する言語が存在すると考えられている。Aikhenvald (2018: 4) によると、情報源 (information source) を表現する方法はいくつか存在する。その中で Evidentiality を表現する形式を大きく二つに分類している。一つは、文法・形態的形式で明示する形式 (closed system) である。その他の方法が evidentiality strategies と呼ばれるものである。これは、その意味を表すのに、モダリティ・アスペクト・様々な補部が用いられる手段を指す。Aikhenvald によると、Evidentiality は大きく以下の 6 つに分類できるとしている。

表 1 Recurrent terms in languages with grammatical evidentiality systems (Aikhenvald 2018: 12)

- I. VISUAL: covers information acquired through setting.
- II. NON VISUAL SENSORY: covers information through hearing, is typically extended to smell and taste, and sometimes also touch.
- III. INFERENCE: based on visible or tangible result.
- IV. ASSUMPTION: based on information other than visible results: this may include logical reasoning, assumption or simply general knowledge.
- V. REPORTED: for reported information with no reference to who it was reported by.
- VI. QUOTATIVE: for reported information with an overt reference to the authorship of the quoted source.

それを踏まえた上で、Aikhenvald は言語が持つ Evidentiality の意味体系を分析している。その分析によると、世界の言語が持つ Evidentiality の意味体系は A1~D1 の 17 のタイプに分類できるとされている。全ての体系をここで詳述することは避けるが、本稿で扱う喜界島方言・他の琉球方言は A1 もしくは B1 に属すると考えられる。

表 2 The grouping of semantic parameters in evidential systems (Aikhenvald 2018: 13) (筆者編)

		Visual	Sensory	Inference	Assumption	Reported	Quotative
2 choices	A1	firsthand/ no-term		non-firsthand			
3 choices	B1	direct		inferred		reported	

2.2 琉球方言における Evidentiality 研究

喜界島方言における Evidentiality 研究に先行研究は存在しないが、他の琉球方言における Evidentiality の先行研究はいくつか存在する。本稿では、その中でも首里方言を扱った工藤他 (2007) を取り上げる。工藤他 (2007) は Evidentiality を「話し手が事象を目撃したこと」を表す Direct Evidentiality と「話し手が形跡や伝聞によって事象を間接的に認識したこと」を表す Indirect Evidentiality に分類し、そして Indirect Evidentiality に関しては、Inference (間接的証拠に基づく確認)・Hearsay (伝聞による間接確認) を下位分類として設定し演繹的に調査を行なっている。首里方言における Evidentiality は、アスペクト・テンスと密接に関わった形式で標示されると考えられている。

[太郎の部屋の引き雨戸がガタガタと開く音を聞いて]

(1) *'ju:bi junakani taru:ga hasiru ?aki.tan.*
 ゆうべ 夜中に 太郎が 雨戸を (開けた)

(工藤他 2007: 170)

例文(1)では、聴覚を通して太郎が雨戸を開ける事象を直接確認している。すなわち Direct

Evidentiality を表している。

[雨戸は今閉まっているが、木の葉が部屋に入っているのを見て]

(2) *ta:ganaga mata hasiru ?akite:N.*
誰かが また 雨戸を (開けたのだ)

(工藤他 2007: 168)

例文(2)では、直接その事象を確認していないが、形跡に基づき誰かが雨戸を開けたという動作を間接的に確認・推定している。すなわち Indirect Evidentiality の Inference を表している。

[錆びて開かない箱が開いたのを知り、誰が開けたのだろうと思っていたところ、発話現場で太郎が開けたことを聞いて]

(3) *kunu hako: taru:ga ?akite:N.*
この 箱は 太郎が (開けたのだ)

(工藤他 2007: 169)

例文(3)でも同じく、直接その事象を確認していないが、他者からの情報を基にその事象を間接的に確認している。すなわち Indirect Evidentiality の Hearsay を表している。

例文(2)(3)を観察するに、Inference・Hearsay に関して形態的差は確認できない。しかし、(1)と(2)(3)から Direct Evidentiality・Indirect Evidentiality 間で形態的差異を確認できる。従って、首里方言の Evidentiality には Direct Evidentiality・Indirect Evidentiality の二項対立が存在すると考えられる。

3. 喜界島方言における Evidentiality の記述的概要

ここでは、喜界島方言における Evidentiality の標示体系を紹介する。提示するデータは全て筆者のフィールドワークで得たものである。なお、調査に使用した例文は工藤他(2007)から引用した。一部筆者が改変し調査に使用した例文も存在する。

3.1 Direct Evidentiality

本研究においては Direct Evidentiality を形態素で明示する形式は見られなかった。

[太郎が部屋の引き雨戸を開くのを見て]

(4) *yunani tharoo=nu amado ake-tan-doo.*
ゆうべ 太郎=NOM 雨戸 開ける-PST-ASS.

「ゆうべ、夜中に太郎が雨戸を開けた。」

3.2 Indirect Evidentiality

喜界島方言において *hu* という形態素が Indirect Evidentiality を担っていると考えられる。2.2 で述べた通り、首里方言には Inference と Hearsay で形態的差異は見られない。それとは対照的に、喜界島方言では Inference の文脈で、Hearsay を表す *hu-tiha* を用いた文は非文となり

容認されない。

[猫の遺体は見えていないが、道路に存在する血痕を見て猫が死んだことを推定する。]

(5) *guruu=nu si-yoo-hu-jaro (*hu-tiha).*

猫=NOM 死ぬ-PROG- INDIR.EVID-INFR (*INDIR.EVID-REP)

「猫が死んでいたのだ。」

3.3 Inference

Inference は基本的に *huja(ro)* という形で表される。Indirect Evidentiality を表す *hu* にコピーの推量形 *ja(ro)* (白田 2016: 80) が融合した形であると考えられる。例文(2)では PST (過去テンス) を表す形態素 *ta* と異なる形態素で Indirect Evidentiality (Inference) が示されている。

[雨戸は今閉まっているが、木の葉が部屋に入っているのを見て]

(6) *than=ŋa ka mata amado akee-ta-hu-jaro.*

誰=NOM INDF また 雨戸 開ける-PST-INDIR.EVID-INFR

「誰かがまた雨戸を開けたのだ。」

3.4 Hearsay

Hearsay は基本的に *hutiha* - という形で表される。Indirect Evidentiality を表す *hu* - に伝聞の意味を表す形態素 *tisa* - (白田 2016: 145) が融合した形であると考えられる。

[錆びて開かない箱が開いたのを知り、誰が開けたのだろうと思っていたところ、発話現場で太郎が開けたことを聞いて]

(7) *un hako tharoo=nu akee-ta-hu-tiha.*

この箱=TOP 太郎=NOM 開ける-PST-INDIR.EVID-REP

「この箱は太郎が開けたのだ。」

4. 形態統語的分析

前述した通り、喜界島方言における Evidentiality 体系は、まず「話し手が直接認知した情報を基にする命題を示す場合」の Direct Evidentiality と「話し手が伝聞をはじめとした間接的証拠を基にする命題を示す場合」の Indirect Evidentiality に分けられる。後者の Indirect Evidentiality はここから二つの下位分類に分けられる。一つは、間接的な証拠を基に情報を推測する場合の Inference と、もう一つは、他者からの間接的情報を基にする場合の Hearsay である。Aikhenvald (2018) のように Inference や Hearsay を Evidentiality の一種として考える立場もあるが、本論文では、Evidentiality は Direct Evidentiality と Indirect Evidentiality の二項対立を成すという (Willet 1988) 等の立場を支持する。このことは、以下で行う喜界島方言の *ja(ro)・tisa* の分析から得られる帰結である。

喜界島方言における Indirect Evidentiality 標示形式は情報源(information source), すなわち Indirect Evidentiality を義務的に標示する形態素 *hu* に, コピュラの推量形 *ja (ro)* (白田 2016: 80) ・伝聞の意味を表す形態素 *tisa* (白田 2016: 145)がそれぞれ融合した形であると考えられる。*hu-jaro* ・ *hu-tiha* という一見連続した形態素は *hu* と *ja(ro)* ・ *tiha* に分裂していると考えられる根拠は以下の例文にある。

- (8) *aree* *tharoo=nu* *yaa* *tisa.*
 あれ.TOP PN=GEN 家 REP
 「あれは太郎の家だそうだ。」

(白田 2016: 141)

- (9) *ičiban* *minda-ha-tan* *munoo* *booru+uč-i* *jar-oo.*
 一番 楽しい-ADJVZA-PST FN.TOP ボール + 打つ-NMLZ COP.NPST.INFER
 「一番楽しかったのはボール打ちだろう。」

(白田 2016: 174)

ja(ro) ・ *tisa* が形態的に独立することから, これらの形態素はそれぞれ「推量 (Inference)」 「伝聞 (Reported)」を表すムードの一種であると考ええる。

ここで議論を Evidentiality に戻す。喜界島方言における Indirect Evidentiality を標示する形態素 *hu* は拘束形態素(bound morpheme)である可能性が高い。喜界島方言を包括的に記述した先行研究白田(2016)を見る限りにおいて, *hu* が単体で用いられる例文は確認できない。Indirectivity (情報確認の間接性) と表 1 における Evidentiality の下位分類である INFERENCE ・ ASSUMPTION, REPORTED ・ QUOTATIVE がそれぞれ別の形態素で標示され, それらを組み合わせる形式は他の言語にも存在する。

実際, モンゴル語の一種である Kalmyk における Evidentiality の表示形式は喜界島方言のそれと類似している。他者から得た情報を表す文(Reported sentence)では, Indirect Evidentiality を表す *ž* と現在時制を表示する形 *gi* ‘say’を合わせた形式で *ž gina* と表示する。

- (10) *Batah-as* *bičg* *ir-ž* *ginä,* *ünn-ij?*
 NAME-ABL letter come-INDIR.EVID[3SG/PL] REP truth-INTER

(They say) A letter from Bata has come, is it true?

(Brosig & Skribnik 2018: 568-569)

5. まとめと今後の研究課題

喜界島方言における Evidentiality の表示体系は大きく二段階で表示される。第一段階は Direct と Indirect の対立である。Direct の場合は無標であるが, Indirect の場合 *hu* という形態素がそれを標示する役割を担う。第二段階として, Indirect Evidentiality を表す *hu* という形態

素は, Hearsay・Reported を表す tiha, Inference を表す ja(ro)を下位分類として選択する。しかし, この二つはあくまで異なる範疇に属していると考えられる。

喜界島方言をはじめ, 琉球諸語の Evidentiality 研究はまだ十分とは言えない状況にある。類型論的観点から Evidentiality 体系を記述すること, また, その体系や構造を形態統語論的観点から分析することが今後の課題として挙げられる。

略号一覧

3 = 3rd person; ABL=ablative; ADJVZ = adjektivizer; ASS = assertive; FN = formal noun; GEN = genitive; INDF = indefinitizer; INDIR.EVID = Indirect Evidentiality; INFER = Inference; INTER = interrogative; NMLZ = nominalizer; NOM = nominative; PL = plural; PROG = progressive; PST = past; REP = reported; SG = singular; TOP = topic

(Aikhenvald 2018: x-xxiii; 白田 2016: 182-184)

謝辞

本研究を進めるにあたって, 多くの方々にご協力していただきました。特に, 調査の機会を与えてくださった, 指導教官である今西祐介先生には深く感謝申し上げます。調査地である喜界島では, 生島常範氏, 大友照子氏, 緋月真歩氏, 吉田米子氏 (以上 50 音順) を始めとした島民の方々に多大なご支援を頂きました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。なお本研究は, 科研費 18K12388 (研究代表者: 今西) の助成を受けたものです。

参考文献

Aikhenvald, Y. Alexandra. (ed.) 2018. *The Oxford Handbook of Evidentiality*. Oxford University Press.

Brosig, Benjamin and Elena Skribnik. 2018. *Evidentiality in Mongolic*. Aikhenvald, Y. Alexandra. (ed.) 2018. *The Oxford Handbook of Evidentiality*. 564-569. Oxford University Press.

工藤真由美・高江洲頼子・八亀裕美 2007. 首里方言のアスペクト・テンス・エヴィデンシヤリティー. 『大阪大学大学院文学研究科紀要.47』 151-183.

白田理人 2016. 『琉球奄美喜界島上嘉鉄方言の文法』 京都大学博士論文.

Willet, Thomas. 1988. *A cross-linguistic survey of the grammaticalization of evidentiality*. *Studies in Language* 12: 51-97